

青年期前／中期の抑うつ傾向と自己観・自己意識との連関

石 井 佑可子

1. 問題と目的

(1) 抑うつ'のアナログ研究

近年軽度の抑うつを扱ったアナログ研究が、臨床現場への示唆や、それ自体の過程を解明するために社会心理学の分野で盛んに行われてきている。

そもそも抑うつに陥りやすい人の認知傾向を探る諸研究は Beck (1976 ; 大野訳、1990) がうつは感情の障害の結果認知が歪むのではなく、認知が独特にネガティブに歪んだ結果、抑うつ的な感情を引き起こすのだと指摘し、ネガティブな認知スタイルに注目したことからは始まった。その後研究が重ねられ、幾つかの理論が生み出された。

代表的なものとしてはコントロールの予期に焦点をあてた Abramson, Seligman, & Teasdale, (1978) らの改訂版学習性無力感理論がある。これはネガティブな出来事をどうすることも出来ないという見通しが抑うつにつながるのだが、その際のコントロール不能感と抑うつを媒介しているのは誤った原因帰属であるとしている。またその他にもともと抑うつ的な帰属スタイルを持つ人がネガティブな出来事にあうことで抑うつに陥るのだとする素因－ストレスモデル (Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson, 1982) などがある。

その中で抑うつの自己注目スタイル (Pyszczynski & Greenberg, 1987) を説明する 3 段階モデル (坂本、1997、1998) が関心を集めている。

抑うつの自己注目スタイルとは自己注目 (自分に意識を集中していること) と抑うつ状態が類似していることに着目したもので、大まかに言えば「自己へ注目しやすい人は抑うつに陥りやすい」ということを主張している。

自己へ注意を向けることで何が起こるのだろう

か。自己注目について表した Duval & Wicklund (1972) の客体的自覚理論によると、「客体的自覚状態 (外部と自己のうち、自己へ注意を向けている状態＝自己注目状態)」にある人は自己を意識することで自分が注目している側面についての適切さの基準・あるべき理想の状態が明白にされる。それによって自己評価が行われると理想自己と現実自己のギャップを意識せざるを得なくなり、結果として理想に達していない自分に気付くことから不快感情を抱くという現象に陥る、という過程を辿るという。Pyszczynski らはこの状態と抑うつとの共通点を挙げ、抑うつ的な自己注目スタイルを提案している。抑うつについての殆どの研究が抑うつ的な認知の様相に焦点を当てているのに対して、この理論では、個人が持つネガティブな信念や認知スタイルの内容については特に問題にしていない。彼らの理論はその抑うつ的な認知が如何に引き出され、また如何に持続していくかについて言及している。そしてそれによって抑うつの「発生」「維持」の過程を明らかにすることが出来る点で有効といえる。

しかし自己注目と抑うつ現象とは類似してはいるものの、全く同じなわけではない。ポジティブな出来事後の自己注目は抑うつとは逆の結果を生むことも考えられるし、また先に挙げた Duval と Wicklund の客体的自覚理論では自己注目の結果行われる自己評価で不快感情を抱いた後、その状態から脱するために注意をそむける過程についても述べられている。自己注目状態は誰もが経験するが、通常はそこで抑うつに陥ることを回避するように対処するので自己注目自体が抑うつの説明になるものではない。そこで坂本 (1997) は自己注目から抑うつの発生・維持過程を明らか

にするために3段階モデルを提起し、抑うつと自己注目との関係を更に明確にしようとした。3段階モデルは時間的流れに沿った自己注目の始発・作動・持続の各段階からなっていて、それぞれの段階に、抑うつが起こるきっかけ・抑うつの発生・抑うつの維持が対応づけられている。このモデルの利点として坂本は原因帰属行為のしやすさや抑うつの発生・維持について説明できることをあげている。また抑うつからの回復へも示唆を与えることができるかと主張する。

自己注目と抑うつとの関係を調査した研究には自己意識尺度と抑うつとの関連を調べたものがある。自己意識とは自己注目のうち、自己へ注意を向けやすい性格特性を指す(押見、1990 参照)。Feningsstein, Scheier, & Bussら(1975)によると、自己意識には身体的特徴や行動的特徴・人格的特徴などの他者によって観察され気付かれうる自己の状態である「公的自己意識」と、感情や欲求・生理的状态などの本人にのみ気付かれる内面的な「私的自己意識」、そして「対人不安」があるとされている。抑うつと自己意識との関係について検討したこれまでの研究を坂本(1997)がまとめたところによると、サンプル(大学生と臨床うつ患者)や文化(日米など)を問わず、私的自己意識と抑うつとの有意な相関が報告されている。また3段階モデルに則った研究については、それぞれの段階毎に研究がなされている(坂本、1994、1997、1998 など)。

(2) 青年期前期・中期の抑うつ傾向

抑うつのアナログ研究の対象者は、多くが大学生などの成人期にあたる人々である。しかし臨床の領域では児童期・青年期前期から既に抑うつが存在することが一般的に認知されている。例えば大井(2001)は特に14、15歳以降になるとうつ病に生物学的条件ではなく、心因的な要因が重要な役割を果たすようになると述べている。それにも関わらず、これらの時期を対象とした実証研究は数少ない。成人期へ向けて抑うつがいかに萌芽し、また連続していくのかなど臨床場面でも未だ明ら

かにされていない問題も多く、抑うつの初期発生のメカニズムを探ることは重要な課題である。

Garber(2000)は児童期・青年期を対象とした抑うつの諸研究を総説し、児童期中期にあたる8歳頃からネガティブな認知・説明スタイルと抑うつの関係が成人と類似したような形で見られ、中学生頃の年代になると認知の素因―ストレスモデルがあてはまるようになるのではないかと述べている。しかし自己注目と抑うつの関係について、児童期・青年期を対象に調査した研究は殆どない。

そこで本研究では青年期前／中期にあたる中学生・高校生を対象とし、自己注目と抑うつ傾向との関係を調査することとした。

但しこの年代は身体的・心理的・社会的において大きな過渡期にあり、自己や他者に対する認知が成人期とは大きく異なる可能性がある。自己注目と抑うつの関係を取り上げる際には、その特徴を考慮に入れる必要があるだろう。

青年期は思春期とともに始まる。よって、青年期前期の大きな特徴は第二性徴を迎えた身体 of 著しい変化である。身体が大きく変化することで、それまでの幼児的な自己イメージを維持し続けることが難しくなり、自分自身に対する概念を変えざるを得なくなる。同時に、家族からの情緒的な独立を果たそうとするのもこの時期である。そして、養育者からの情緒的自律性を獲得するのといわば引き替えに仲間との親密な関係性の形成に多大な関心を寄せる。しかしこの状態を単純にポジティブなものとはばかりは言い難い。仲間関係は、それまで依存していた家族との分離による不安定さを補うため、やむを得なく結ぶものとも考えられる。家族との間で通すことのできた自律性を仲間の中では貰けないということが多々あるとしても、家族からの心理的独立を果たしてしまった以上仲間との関係を壊す訳にはいかず、自分を曲げて何とか維持しようとしてしまうこともあるだろう。つまり関係に依存することが、同時に関係からの圧力に屈することにもなりうるのである。その結果、不本意ながらも周りについつい合わせてしまいうる自分の自分を出すことが出来ずに悩むこと

もあるのではないか。

そのような状況の中で、この年代は他者から自分がいかに見られているか、またその他者との関係性をいかに壊さず調和的に維持し得るのかといったことに一種病的なまでの敏感さを有することもあるだろう。前述の身体的な変化によって外見が大きく変わっていくこととも合わせて、この時期は自分の内面にある思考や理想よりも「見られている自分」を特に強く意識し、また重視しているのではないか。

以上のことから青年期前期・中期の抑うつと自己注目との関係を探る際には、まず初めに彼らの抑うつが自己意識のどの側面と関係するのかについて探ることが重要である。つまり成人を対象とした調査での私的自己意識との関係のみならず、周りから見られている自分を意識する公的自己意識とについてもその連関を調べる必要があると思われる。

また仲間関係への依存の時期という点から、関係自体への関心についても検討する必要がある。公的自己意識状態にあっても、注意を向けている対象は自分自身である。その際注意を向けている自分が関係にどの程度拘泥しているのか、関係のどの位置におかれているのかについての見解は問われない。しかし、青年期前期／中期の「見られる自分」を考えると、単に周りから見られているという意識だけではなく、その見られている自分が周りの人とどのような結びつきを持っているのかについての信念も重要な要素であろう。

そこで本研究では関係への依存、拘泥についても自己意識と同様に抑うつとの連関を探ることとした。関係性への依存の測定には、相互独立的－相互協調的自己観の概念を用いることとした。

相互独立的自己観と相互協調的自己観はもともと文化的に共有された自己観の分析モデルとして、Marcus & Kitayama (1991) が分類したものである。相互独立的自己観とは、自己は他者から区別され独立して存在しており独自性を出すことが必要と考える自己観である。一方相互協調的自己観とは、自己は他者や周囲の出来事と深く結びつ

いており関係の中に存在しているという自己の捉え方である。今回は関係への依存について、他者や関係に応じて自己をいかに調整する必要があるかを問うことで把握可能と考え、この相互独立的自己観を「関係に拘泥しない信念」、相互協調的自己観を「関係に依存する信念」と捉えて使用した。

(3) 尺度について

アナログ研究で抑うつの程度を測るときには通常自己記入式の質問紙を用いる。多くは抑うつの重症度を測るもので、各項目への得点の総合点によって判断される。しかしこの質問紙について北村 (1995) は、項目が多い尺度への回答は調査参加者の集中力や協調性によっては困難で、うつに関していえば極度に重症な患者の総合点が却って低くなることもあると指摘する。また北村は、うつ病の質問票の妥当性について最近問題視されていることとして、身体症状の混在によるバイアスをあげている。うつ病の診断基準には体重の増加や減少などの身体面にかかわるものがあり、自己記入式の質問票にもそれに沿う質問がいくつかあげられている。しかしこの質問では例えば痴呆や、悪性腫瘍が並存し治療薬の副作用が認められるような場合に抑うつ以外の原因で得点が高くなってしまい、偽相関が生じる可能性が増大してしまう。今回対象となる中学生や高校生についても先ほど述べた通り、身体が大きく変化する時期にあるために普段から身体の調子が気になったり、体重の変動が激しくなったりしていることは十分予測できる。よって本研究では島・鹿野・北村・浅井ら (1985) の抑うつ尺度の各項目について北村 (1995) が偽相関の可能性を検討したとめた結果に従って不適当と思われる項目を省き、その中から更に中学生・高校生の抑うつに関係すると思われる項目を選んだ²。項目数に関しても楽に答えられるであろう数を考慮して、原尺度の52項目のうち14項目を採用し調査に使用した (Table 1)。また原尺度は項目についてはいい／いいえで答える形式のものだったが、今回は他の尺度と一貫させる形を

取り、4件法で回答を求めた。

自己意識については、後藤・向山・辻・黒丸(1989)らが中学・高校生を対象に作成した14項目からなる尺度を用いた。これはFenigsteinら(1975)が作成した自己意識尺度に基づいて自己意識を発達的な見地から捉えて作成されたものである。内容は、私的自己意識について問うもの4項目、公的自己意識について問うもの5項目、対人不安について問うもの5項目からなる。

相互独立的-協調的自己観については高田・大本・清家(1996)の作成した改訂版相互独立的-相互協調的自己観尺度から項目を選択し用いた。原尺度は20項目、4因子(評価懸念、独立性、個の認識・主張、他者への親和・順応)からなり、7件法である。調査の対象に中学1年生も含まれていて、自分についての質問に正しく7つの選択肢の中から選ぶのが困難な場合もあるという学校側からの指摘があったことと、質問数が多いと回答自体が負担となることから、4件法に改め、各因子から因子負荷量の高いものを選び、評価懸念について2項目、独断性について3項目、個の認識・主張について3項目、他者への親和・順応について3項目からなる11項目を使用した。全体的には相互独立性の項目数6、相互協調性の項目

(Table 1 使用した質問項目 ; 抑うつ)

抑うつ 質問項目

- 1 ひどくいらいらする
- 2 決められた仕事はやり続けることができる
- 3 本や新聞などの長い文章を苦勞せずに集中して読める
- 4 寝付きが悪い
- 5 そわそわして落ち着かない
- 6 自分がつまらないように感じ、恥ずかしく思う
- 7 何をやっても楽しくて、つまらないなどとは思わない
- 8 声の調子が沈んで元気がない
- 9 怒りっぽい、神経がピリピリしている
- 10 気分がいい
- 11 ご飯がおいしい
- 12 歩き回っていないくは気が済まない
- 13 人からは落ち着いているように見えると思う
- 14 他の人と同じくらいには能力があると思う

数5からなる (Table 2)。

(Table 2 使用した質問項目

; 相互独立的 — 相互協調的自己観)

相互独立的 — 相互協調的自己観 質問項目

(相互独立的自己観)

- 1 常に自分自身の考えを持つようにしている
- 2 最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う
- 3 自分でいいと思うのなら、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない
- 5 自分の周りの人が異なった考えを持っていても、自分の信じることを守り通す
- 9 自分の意見をいつもはっきり言う
- 11 いつも自信をもって発言し、行動している

(相互協調的自己観)

- 4 相手は自分のことをどう評価しているかということから、他人の視線が気になる
- 6 他人と接するとき、自分と相手との間の地位や相対関係が気になる
- 7 仲間の中での和を維持することは大切だと思う
- 8 自分の所属団体の仲間との意見が対立することを避ける
- 10 人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い

2. 方法

(1) 調査対象者

大阪府下Y中学校全生徒604人のうち、回答に不備があったものなどを除く497人(1年男子81人、女子86人、2年男子82人、女子78人、3年男子70人、女子100人)と、大阪府下のT高校1、2年生のうち、回答に不備のあったものなどを除く503人(1年男子137人、女子146人、2年男子116人、女子104人)計1000人。

(2) 質問紙の構成

- ① 相互独立的-相互強調的自己観尺度: 改訂版相互独立的-相互協調的自己観尺度(高田他、1996)より、11項目を使用。
- ② 自己意識尺度: 中学・高校生における児童用自己意識尺度(後藤ら、1989)を使用。
- ③ 抑うつ尺度: 島ら(1985)の尺度から14項目を使用。³

また、フェイスシートで学年、性別、クラブ、

塾へ通っているかどうかを問うた。

(3) 手続き

各学校へ依頼し、学級ごとに質問紙を配布し回答してもらった（調査期間；中学校2002年4月中旬、高校2002年11月上旬～中旬）。各項目についてそれぞれ自分に、1. 全くあてはまらない 2. あまりあてはまらない 3. 少しあてはまる 4. とてもあてはまる の4段階評定で回答を求めた。

3. 結果

抑うつ傾向得点と、私的自己意識、公的自己意識、相互独立的自己観、相互協調的自己みの各得点を求め、抑うつ得点とそれぞれの要因得点との相関を男女、年代別に求めた（Table 3～6）。

[中学生男子]

相互独立的自己観（-.26）との間に有意な負の相関が見られた（ $p<.001$ ）（Table 3）。

[中学生女子]

公的自己意識（.20）との間に正の相関（ $p<.001$ ）、相互独立的自己観（-.25）との間に負の相関が有意に見られた（ $p<.001$ ）（Table 4）。

[高校生男子]

公的自己意識（.14）（ $p<.05$ ）・私的自己意識（.17）との間に正の相関（ $p<.001$ ）、相互独立的自己観（-.18）との間に負の相関が有意に見られた（ $p<.001$ ）（Table 5）。

[高校生女子]

私的自己意識（.17）・相互協調的自己観（.14）との間に正の相関（ $p<.05$ ）、相互独立的自己観（-.13）との間に負の相関が有意に見られた（ $p<.05$ ）（Table 6）。

4. 考察

抑うつに影響する自己の側面は学年、性別ごとに違いが見られ、一部成人期と異なる傾向が見られた。

まず自己意識について性別ごとに影響する側面の変遷をそれぞれ追っていくと、男子は中学生の

Table 3 抑うつと各側面との相関；中学生男子

(N=233)

	抑うつ	公的自己	私的自己	協調自己	独立自己
抑うつ	1	.05	.08	.10	-.26**
公的自己		1	.33**	.35**	.16*
私的自己			1	.26**	.08
協調自己				1	-.15*
独立自己					1

** 1%水準で有意（両側）

* 5%水準で有意（両側）

Table 4 抑うつと各側面との相関；中学生女子

(N=264)

	抑うつ	公的自己	私的自己	協調自己	独立自己
抑うつ	1	.20**	.05	.10	-.25**
公的自己		1	.38**	.44**	.03
私的自己			1	.21**	.19
協調自己				1	-.13
独立自己					1

** 1%水準で有意（両側）

* 5%水準で有意（両側）

Table 5 抑うつと各側面との相関；高校生男子

(N=253)

	抑うつ	公的自己	私的自己	協調自己	独立自己
抑うつ	1	.14*	.17**	.11	-.18**
公的自己		1	.34**	.51**	-.14*
私的自己			1	.22**	.25**
協調自己				1	-.29**
独立自己					1

** 1%水準で有意（両側）

* 5%水準で有意（両側）

Table 6 抑うつと各側面との相関；高校生女子

(N=250)

	抑うつ	公的自己	私的自己	協調自己	独立自己
抑うつ	1	.10	.17*	.14*	-.13*
公的自己		1	.39**	.49**	-.10
私的自己			1	.29**	.09
協調自己				1	-.28**
独立自己					1

** 1%水準で有意（両側）

* 5%水準で有意（両側）

段階では公的・私的自己意識共に抑うつとの関係が見られず、高校生になって公的・私的自己意識両方との関係が出現するようになっている。それに対して女子では中学生の時点で既に公的自己意識と抑うつとの関係が見られ、高校生になると私的自己意識との関係へ移っていくという結果が得られた。

小学校高学年における自己意識を検討した桜井(1992)によると、小学校5・6年生の時点では女子の方が男子よりも公的自己意識が高いという結果が示されている。児童期後期から青年期前期にかけて、総じて女子の方が「見られている自分」をより早く感知しているようである。これは思春期が女子においていち早く到来することに密接に関係すると考えられる。つまり公的自己意識と抑うつとの関係は、男女ともに思春期の発動がきっかけとなって現れるといえる。思春期における身体イメージの変化に戸惑い、またそれと連動して、自分自身が周りからどのように思われているかについての懸念が多くなっていくのだろう。その結果自分の外面に関する情報を多く仕入れようとすることで、公的自己意識が特異的な高まりを見せ、抑うつ的な自己注目の型になるのかもしれない。

いずれにしても、青年期前期／中期の間に公的自己意識が抑うつと関係する時期を男女共に経ているということが示されたことで、この時期の抑うつ傾向における「見られる自分」の重要性が示唆された。

また、女子において高校生になると公的自己意識が抑うつと関連しなくなることや、私的自己意識と抑うつとの関係への変換にどのような背景があるのかについてはいくつか解釈が考えられる。

一つには、身体の変化が落ち着きを見せ、自己のイメージが安定することで、今度はより自分の内面に関心が向いていくのではないかとということが挙げられる。また、中学生と高校生の環境の変化からも解釈が出来る。高校生になるにつれて、初期の仲間関係への盲目的なめり込みから変化して、自分に合った仲間を選択する付き合い方が出来るようになるのではないか。高校生は中学生

に比べて行動範囲がより広くなり、生活の場も分化していく。そのどこかで自分の興味や関心を共有できる仲間が得られる確率も高くなる。そうした仲間たちとの関係の中で、一度失っていた自律性を再び取り戻すことができるようになるのであろう。周りから見られている自分についても、何もかも意識してしまうのではなく、自分にとって必要な側面にのみうまく意識を高め、適切な程度で自己評価との折り合いをつけることができるようになるのかもしれない。さらには例え公的自己意識が高まったとしても、抑うつに陥らないように調整する方略をこの時期に身につけていく可能性も考えられる。

成人期への連続性に関しては高校生男子・女子における抑うつと私的自己意識との関係が成人期を対象とした先行研究と同じ結果を得たことから、抑うつと連関する自己の側面が青年期前期・中期で公的自己意識から私的自己意識へという過程を経て、既に証明されている成人期型の抑うつ傾向へ推移していくと予想できる。

次に抑うつと関係性への依存との関係についてであるが、相互協調的自己観と抑うつとの関係は学年、性別を通して殆ど見られなかった。この時期、関係に依存し状況志向的な自己観を持っていること自体は抑うつには関係しないということになる。関係を維持しようと心を砕くことは、この年代にとってはごく自然なことで苦労や不快感として意識に上ってることが特に無いのかも知れない。しかし高校生女子においてわずかではあるが相互協調的自己観が抑うつと関係することから、その後青年期後期・成人期へと成長するにつれて、相互協調的自己観が抑うつと関係するようになる可能性はある。このことについては、対象を広げた調査によって明らかにすることができるだろう。

反対に相互独立的自己観については、年代、性別を通して全て抑うつと有意な負の相関が見られた。全体的に他者との協調的関係の維持に関心が深まるこの発達期において、相対的な関係にとらわれず自分自身を貫き得る個人は抑うつに対してある種防衛的な心理的構えを有しているとも解釈

できる。

抑うつ自己注目スタイルや3段階モデルでは、抑うつと負の関係にある自己観については論じられていない。どのような過程を辿って相互独立的自己観が抑うつに負の影響を及ぼすのかについて解明することで、抑うつからの回復や、ひいてはその予防に関する新しいモデルを作ることが可能となるかもしれない。

また相互協調的自己観と同様この関係が成人期以降も連続して見られていくのか、変化するのかについても吟味する余地がある。

今回は青年期前期／中期の抑うつ自己注目スタイルについて探索的に調査を行った。成人期と異なる傾向が見出せたことについては意義があるといえる。ただし、今後抑うつと「見られる自分」との関係について十分に説明するためには更なる調査が必要である。初めにも述べた通り、自己注目が即ち抑うつということではない。そのため自己の側面に単に意識が高まることが抑うつ的とはいえず、それだけでは抑うつとの関係についての十分な解釈にはならない。抑うつにより密接に関連する自己の在り方を既存の自己意識概念に頼らず考案し、検討していくことが求められるであろう。

また、関係依存についても検討が必要である。今回は相互協調的自己観で測定した関係への依存と、抑うつとの関係はほとんど見られなかった。しかし関係への依存ということを経験するような状況志向的な状態だけではなく範囲を広げて捉えることで、抑うつとの関係は見られるかもしれない。例えば共感性の発達において、中高生の時点では「助けを必要としている他者を見たときなどに、自分が不安になってしまい、他者の状況に対応した行動を取れなくなり、苦痛を覚える」という個人的苦痛がその後の段階に比べて高く見られるという報告がある（登張、2003）。このように他者の感情に巻き込まれてしまう形での他者への囚われという点からも抑うつとの関係を調査することが要される。

今後は本研究の結果を踏まえ、詳細な検討が求

められる。その上で、すでに成人期を対象に行われているような3段階モデルに応じた研究を更に進めると、この時期の抑うつや、その回復への示唆などについて一層の理解が深まるのではないだろうか。

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力下さった大阪府下Y中学校、T高等学校の先生方、生徒の皆様には厚くお礼を申し上げます。

参考文献

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E., Teasdale, J. D. (1978) Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*. 87, 49-74.
- A. T. ベック 大野裕訳 (1990) 認知療法 — 精神療法の新しい発展 — 岩崎学術出版社
- (Aaron, T, Beck. (1976) Cognitive Therapy and the Emotional disorders. Universities Press.)
- Duval, S., Wicklund, R. A. (1972) A theory of objective self awareness New York: Academic Press.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., Buss, A. H. (1975) Public and private self-consciousness *Journal of consulting and clinical psychology* 43, 522-527.
- Garber, J. (2000) Development and depression. In Sameroff, A. J., Lewis, M., et al. (Eds). *Handbook of developmental psychopathology* (2nd ed.). pp. 467-490.
- 後藤容子・向山泰代・辻平治郎・黒丸正四郎・新田愛・村田牧子 (1989) 自己意識に関する発達的研究(1) 教育心理学研究大会論文集 31, 217.
- 北村俊則 (1995) 精神症状測定の理論と実際 海鳴社
- 押見輝男 (1990) 「自己の姿への注目」 中村陽吉 編 「自己過程」の社会心理学 東京大学出版 pp21-65.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J. (1987) Self-regula-

- tory perseveration and the depressive self-focusing style: A self-awareness theory of reactive depression. *Psychological Bulletin*. 102, 122-138.
- Markus, H. R., Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review* 98, 224-253.
- Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A., Peterson, C. (1982) Attributional styles and life events in the classroom: Vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality & Social Psychology*. 43, 612-617.
- 坂本真士 (1994) 抑鬱者の性格特性の自己評価におけるネガティビティ・バイアス 心理学研究 65, 156-161.
- 坂本真士 (1997) 自己注目と抑うつ の社会心理学 東京大学出版会
- 坂本真士 (1998) 自己注目と抑うつ ―抑うつ の発症・維持を説明する3段階モデルの提起― 心理学評論 41, 283-302.
- 桜井茂男 (1992) 小学校高学年性における自己意識の検討 実験社会心理学研究 32, 85-94.
- 島悟 鹿野達男 北村俊則 浅井昌弘 (1985) 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学 27, 717-723.
- 高田利武 大本美千恵 清家美紀 (1996) 相互独立的―相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要 24, 157-173.
- 登張 真稲 (2003) 青年期の共感性の発達: 多次元の視点による検討 発達心理学研究 14, 136-148.
- 大井正己 (2001) 児童期・青年期の感情 (気分) 障害 精神医学 43, 352-366.

注

- 1 「抑うつ」とは Depression の訳語であり、気分症状としての抑うつ気分 (depression mood)、症状のまとまりとしての抑うつ症候群 (depressive syndrome)、疾病単位としてのうつ病 (depressive illness) などの意味があるが、ここでの抑うつとはアナログ研究の対象となる軽度のうつ状態、抑うつ傾向を指している。
- 2 調査実施の1ヶ月ほど前に中学校で授業中に生徒が死亡する事故があったため、対象生徒たちに精神的ショックを与えないよう配慮し、抑うつ尺度から「自殺」など、死を連想させる表現のある項目は省いた。
- 3 中学生用の質問紙のみ、質問の文章が難しい項目について中学校の教師の指示に従って分かりやすい表現に改め、ふり仮名をつけた。

(修士課程)